

## 『太平記』における岩松経家一族の考察

Kono, Takahide / 高野, 宜秀

---

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院 国際日本学インスティテュート専攻委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

国際日本学論叢 / 国際日本学論叢

(巻 / Volume)

10

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

38

(発行年 / Year)

2013-03-08

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008959>

『太平記』における岩松経家一族の考察

『太平記』における岩松経家一族の考察

日本文学専攻修士課程二年

高野 宜 秀

一、初めに

私は、『太平記』研究を行う時に史料との対比によって、その考察を行うべきだと考えている。そのような考えに至った理由は、久米邦武（一八三九―一九三二）の『太平記は史学に益なし』という論文である。久米は、『太平記』の記述を作者の創作であるかのように解釈し、歴史学にとって価値のない作品と位置づけたのだ。殊に次の文章は、久米の『太平記』蔑視を最も象徴するものといえる。

「太平記は史学に益なし」<sup>1)</sup>

〈前略〉

筆を趁て無禮譁文禮譁の落咄を始め、無禮譁を形容して、花山院・師賢・四條隆資・洞院實世・日野俊基・僧游雅・玄基等・土岐多治見足助の諸武士と〔烏帽子を脱て髻を放ち、法師は衣をきず白衣になり〕と云までにては事足らぬ故に、〔年十七八なる女の、盼かたち優い、膚ことに滑らかなるを、二十餘人裾の単計をきせて酌を取せければ、雪の膚すき透りて、太液の芙蓉新に水を出たるに異ならず〕とはさながら佛國巴里の淫窩に、レースを衣て店に聯なる娼兒の如く、裸體婦人を連ねたる猥醜い一讀し巻を掩はしむ、

〈後略〉

久米の論文は、「太平記」の価値や豊かな文学性を著しく貶めるものであり、客観的に同時代の史料と対比させてこなかったことによるものと考えられる。しかし、歴史学では、二二世紀の現代社会でも論文執筆や史料集成の時に、「太平記」を史料のように扱うことが多く見受けられる。久米のように無益として排除する極端な論も困るが、「太平記」の記述を過信して、史料のように扱うのも問題である。そこで、両者の折衷ともいえるのが、「太平記」と史料との対照によって史実を追究するという手法ではないだろうか。本論は、このような視座のもとに進めていくことにする。また、使用する「太平記」は、古態本とされる西源院本をメインとしたが、一つの本に依存することを避けるため、適宜他の本も比較させた。「梅松論」は、古本系統の京都大学本を活用した。

新田義貞の鎌倉攻めは、一般的に「太平記」と「梅松論」の記述内容をもとに理解されることが多い。新田義貞の

## 『太平記』における岩松経家一族の考察

研究者として有名な歴史学者降岸純夫は、文学作品の『太平記』や『梅松論』の記述を引用して、歴史的事実のように語っている。奥富敬之は、『上州新田一族』<sup>3</sup>の中で、義貞の鎌倉攻めを述べる際に『太平記』の記述に依存して執筆した。帝京大学文学部史学科元教授の佐藤和彦は、『南北朝内乱』<sup>4</sup>において、『太平記』巻二十の燈明寺囃子における義貞戦死の記述のみで義貞への評価を行っている。佐藤は、巻二十の戦死場面のみで、義貞軍が騎馬を中心にした軍団であったと位置づけた。

若手研究者では、田中奈保が、論文「新田義貞」<sup>5</sup>において、史料を一点もあげず、全面的に『太平記』の記述のみで歴史的事実のように述べている。また、田中奈保は降岸や山本隆志、田中大喜の論文（先行研究）の見解をそのまま引用して、過去の成果を踏襲するにとどまっている。田中奈保は、世良田の有徳人が過酷な鎌倉幕府の徴税（黒沼彦四郎入道と紀出雲介親連）から逃れようと、義貞を頼ったとする私見を述べているが、根拠となる史料や『太平記』以外の資料を提示せず、空論の域を出ていない。そもそも、田中が過酷な徴税といっているが、本当に『太平記』の記述どおり、新田氏へ六万貫を要求したのか、史料で裏づけできていない。この点からも田中は、『太平記』の記述にとらわれ過ぎてしていると指摘したい。

その他、新田義貞の故郷（上野国）にあたる群馬県の自治体編纂の『群馬県史』〈通史編・資料編〉や『太田市史』〈通史編・史料編〉、『新田町誌』〈第四巻特集編〉、『尾島町誌』〈通史編上巻〉は、『太平記』の記述を史料として論文内で引用している。それだけではなく、『太田市史』〈史料編〉と『群馬県史』〈資料編〉は、『太平記』と『梅松論』を史料と位置づけて載せている。群馬県外の自治体編纂の市史では、『逗子市史』<sup>6</sup>が、鎌倉攻めの総大将を足利千寿王と位置づけており、『梅松論』の見解を重視したと思われる。しかし、『太平記』や『梅松論』は、作者の歴史観や

視点、立場によって脚色されているので、依存し過ぎるのは危険であると指摘したい。

「太平記」の鎌倉攻めを考えるにあたっては、新田氏本宗系統の大館氏や堀口氏、脇屋氏もきわめて重要であるが、上野国新田荘内の実力者岩松氏の動向を見なければ、その実態を明らかにできないと考えている。岩松氏は、「太平記」巻十の新田義貞挙兵で生品明神（現国定史跡生品神社境内）に駆けつける武将の一人として描かれている。しかし、「太平記」における岩松経家に関する記述は少なく、鎌倉攻めの役割も不明瞭である。そこで私は、新田と足利の両氏の血統を受け継ぐ岩松経家の一族を「太平記」と史料からの比較・検討を通じて、その動向を明らかにしていきたい。本研究の特色は、従来の歴史学分野と日本文学の枠組みを超越して、その融合によって新しい成果をあげることであり、法政大学国際日本学インスティテュートの学際性（それぞれの領域を有効に機能させること）を活かした軍記物語と史料の比較研究である。

## 二、岩松氏について

岩松氏は、新田氏開祖の義重（源義国の子）の跡を継いだ二代当主新田義兼の女と足利義純（足利氏二代当主足利義兼の子）との間に生まれた時兼が、岩松郷を支配したことから興った。岩松時兼の弟時朝は、田中姓を名乗った。その後の岩松氏は、村田氏や寺井氏、金井氏、田部井氏、藪塚氏、田嶋氏などを分立し、新田荘内に勢力を拡張した。

岩松氏躍進のきっかけは、新田氏本宗家の四代当主新田政義が、鎌倉幕府から預かっていた囚人を逃がすというミ

## 『太平記』における岩松経家一族の考察

スや京都大番役の勤務中に幕府へ無断で出家してしまうなどの度重なる失態を犯し、没落したことによる。さらに没落した新田氏本宗家に代わって登場した世良田頼氏が、文永九（一二七二）年の二月騒動で失脚した。世良田頼氏の正室が名越教時の姉妹だったことによって、事件に巻き込まれるという不運に遭った。長楽寺に伝わる系図によれば、世良田頼氏の注記として以下のような記述がある。長楽寺は、世良田義季が新田莊世良田に明庵榮西の弟子榮朝禪師を招いて創建した寺院（東關最初禪窟）であり、顕・密・禪三學兼修として名をはせた。

〔長楽寺源氏系図〕（長楽寺藏）<sup>8</sup>

文永九年被勘氣流罪佐渡畢、

このように新田政義に代わって、鎌倉幕府に出仕していた世良田頼氏は、二月騒動に連座するかたちになってしまったのである。頼氏は、長楽寺を建立した有力な新田氏一族であったため、長楽寺に位牌も残されている。

〔長楽寺古位牌〕（長楽寺藏）<sup>9</sup>

良隠禪定門世良田次郎前三河頼氏、義季次男康元二年二月十日、世良田之旦那、

頼氏が、その位牌に「世良田之旦那」と刻まれていることから新田氏一族内の有力者というだけではなく、世良田長楽寺の強力なスポンサーであったこともうかがえる。しかし、死亡したとされる康元二年は、西暦一二五七年なので誤りである。

一三世紀のこうした新田氏本宗家と長楽寺建立の立役者世良田氏の惣領頼氏の失脚という相次ぐ出来事が、岩松氏の台頭に大きな影響を及ぼした。

そして、鎌倉後期には岩松亀王丸（後の岩松政経）が世良田氏の一族で、外祖父にあたる得川頼有の養子になって所領を譲り受けると、新田荘屈指の実力者として自他ともに認められることになった。次の史料は、『正木文書』における得川頼有が亀王丸に新田荘内外の所領を譲るものである。

得川頼有讓状（正木文書）<sup>10</sup>

ゆつりわたす所りやうの事

（亀王）  
かめわう丸所

一 （上野）  
かうつけの国新田庄内とくかわのかう、よこせのかう、下えたのむら

一 （但馬）  
たちまの国上三沼庄東方西方

一 （相模）  
さかみの国永用のかう  
（中郡長持郷）

右新田庄内の所りやうらハ、重代さうてんのしりやう也、上三江庄ならひに永用のかうはくんこうの所なり、し

## 【太平記】における岩松経家一族の考察

かるにせんねんのころ、女子源氏ニゆつりたひて、あん(安堵)との御下文を申あたへ候、ここにまこ(孫)かめわう丸八かの源氏のしそくたるあひた、これをやうし(養子)としてちやくしにたて、御下文并てつきのもん(手紙文昔)そうをあひそへて、やうたい(水代)をかきてかめわう丸にゆつりわたすところ也、たたしきやう(京都)と大はんハ大事の御公事たるによりて、ふけん(分限)にしたかひてかめわう丸かはは井こけふんにもはうれいにまかせて、所(用途)のようとうをはいふんすへし、仍子々孫々にいたるまで、さうるなくりやうちすへき状如件、

文永五年五月卅日 散位(得川) 源頼有(花押)

このような新田荘内での急速な勢力の拡張は、新田氏本宗系統の他の氏族との軋轢を巻き起こすことにもつながった。一例としては、元享二(一二三二)年に発生した「用水相論」の文書があり、新田氏本宗系統大館氏と岩松氏の用水をめぐる争いを伝えている。

この争いは、大館宗氏が一井郷沼水(現在の国指定史跡新田荘遺跡の一つ重殿水源)を塞いだことによつて、岩松氏の所領田嶋郷の耕作が不能になつたといふものである。田嶋郷は一井郷沼水によつて成り立っており、水を再び流すべきことを鎌倉幕府に訴えた。大館氏は、岩松政経の代官堯海と激しく争つたものの、結果的に岩松氏の勝訴に終わった。大館氏側が本当に用水を塞いだのかどうかは不明であるが、この訴訟の勝利から、岩松氏の新田荘内での勢力拡張の一端を垣間見ることはできる。以下にその新田荘内の用水をめぐる「正木文書」を載せる。

関東裁許状写(正木文書)<sup>(1)</sup>

(岩松経政)  
 岩松下野太郎入道道定代堯海申上野國新田庄田嶋郷用水事右件用水者、受新田二郎宗氏所領一井郷沼水、令耕  
(大館)  
 作田嶋郷之條往古之例也、而宗氏打塞彼用水堀之由申之処、宗氏如陳状者、打塞所見何事哉、宗氏全不違  
(重殿水源)  
 乱云々、為向後可成給御下知之旨堯海申之、此上者不及異儀、任先例可引通之状、依鎌倉殿仰、下知如件、

元亨二年十月廿七日

(北条高時)  
 相模守平朝臣(花押影)  
(金澤貞顯)  
 修理權大夫平朝臣(花押影)

このように大館宗氏側は岩松政経の代官堯海と争つたものの、敗訴している。新田荘の開発が進んだことによつて、水の確保という問題が、深刻になつていたことを指摘できる。新田荘が扇状地に立地したことによつて、農作業の命ともいえる用水の確保が難しかったと思われる。岩松氏と大館氏の争いは、鎌倉時代だけではなく、室町時代にも巻き起こされる可能性があつた。

足利成氏書状写 (正木文書)<sup>12)</sup>

(教氏)  
 大館上總介知行分等事、可被散之由其間候、不可然候、但凶賊相籠子細候者、能々極實否可被得上意候、恐々

謹言、

到来享徳四 (正力)  
 三 月十七日

## 『太平記』における岩松経家一族の考察

正月十三日

(尾利)  
成氏 (花押影)(持因)  
岩松左京大夫殿

岩松持因(京兆家惣領)は、享徳の乱で混乱した間隙をぬって、大館氏の新田荘内の保有地を奪い取ろうとしていたのである。古河公方足利成氏が、京都方(室町将軍側)に対して慎重な姿勢で臨んでいたために、大館氏の所領は守られた。このように岩松氏と大館氏は、鎌倉時代の用水のトラブルに端を発し、因縁深いライバル関係にあったと指摘できる。大館氏は、氏明の戦死後にその子息義冬が足利方に降って室町幕府の奉公衆に取りたてられた。しかし、大館氏が岩松氏とともに近衛家に出向く史料も残されていて、両氏の関係性を考える上で重要である。

『後法興院記』 応永二年二月条<sup>(1)</sup>

廿四日乙卯、時々雨下、是日婦宅宇治、先是大館次郎、岩松<sup>(明純)</sup>兵庫頭等来、令<sup>(近衛家)</sup>対<sup>(勝元)</sup>面、今朝遣使於細川許  
命恐悦之由、

この史料は、岩松明純(岩松家純の子)が、大館次郎と一緒に京都の近衛家当主政家に謁見したというものである。このように大館氏が、岩松明純(礼部家惣領)と協調することによって、岩松持因(京兆家)に対抗しようと考えたのかもしれない。

鎌倉攻めの頃の岩松氏の当主は経家であったが、彼は新田荘外にも所領を有しており、本宗家の惣領義貞を凌駕する勢いがあったものと考えられる。岩松経家は、鎌倉攻め後に義貞・脇屋義助兄弟に見切りをつけて、足利尊氏・直義兄弟に味方している。「大泉町誌」〔下巻歴史編〕<sup>14</sup>によれば、岩松氏と山名氏、里見氏は、拳兵当初から足利方だったとする見解も出されており、重要な指摘である。「建武年間記」によると、経家は鎌倉将軍府に出仕して、関東番番衆の一人として足利直義や成良親王を補佐したとされる。建武二（一三三五）年七月、中先代の乱が発生すると、北条時行（得宗北条高時の遺児）軍を武蔵国女影原で迎撃して、討死した。

『太平記』によれば、元弘三年五月の生品拳兵に「岩松三郎経家」と記述され、義貞とともに同道したとされる。しかし、全体的に『太平記』の中の岩松氏は、重要視されておらず、鎌倉攻略の軍団編成でも大将格ではなく、義貞の本軍に従う一武将程度の位置づけとなっている。

しかし、史実の岩松氏は、足利方についてことによってその血脈を保ち、新田義貞や脇屋義助、江田行義の没落した後の新田荘を自らの支配下に収めることに成功し、同荘に新田岩松家として君臨した。

### 三、『太平記』における岩松氏

岩松氏が『太平記』巻十の鎌倉攻めの記述においてどのように描かれているのか、見ていきたい。ここでは、『太平記』の中でも古態本とされる西源院本と歴史事実と詳しい天正本から該当箇所を引用する。

## 【太平記】における岩松経家一族の考察

西源院本「太平記」卷十「義貞叛逆事并天狗催越後勢事」<sup>16</sup>

五月八日卯刻ニ生品明神之御前ニソ旗ヲ擧ケ、宣旨ヲ開テ三度はヲ拝シ、笠懸ノ野邊ヘ打テ出ラル、其勢僅ニ二百五十騎ニハ過サリケリ、

天正本「太平記」卷十「新田殿擧義兵事」<sup>17</sup>

同五月八日卯尅ニ生品明神ノ御前ニテ旗ヲ擧テ繪旨ヲ披テ三度はヲ拝シ笠懸野ヘ打出ラル、相随人々ニハ氏族ニ大館二郎宗氏、子息孫二郎幸氏、二男彌二郎氏明、三男彦二郎氏兼、堀口三郎貞満、舍弟四郎行義、岩松三郎経家、里見五郎義胤、脇屋二郎義助、江田三郎光義、桃井二郎尚義是等ヲ宗徒ノ兵トシ、百五十騎ニハ過サリケリ、

西源院本は、義貞の挙兵を簡素に記述しており、生品に集合した武将の名前をあげていない。しかし、天正本は詳細に一族の名を書き連ねている。大館氏と堀口氏の新田氏本宗系統の実力者を続けて記述した直後に「岩松三郎経家」と記述している。義貞の実弟脇屋義助よりも先に名前をあげている。岩松氏の鎌倉時代の躍進や足利氏と新田氏の両方の血統を受け継ぐ事実を理解した上での描き方といえる。次に新田軍が、幕府の本拠地鎌倉を攻める陣立てを見ていこう。

西源院本「太平記」卷十「鎌倉中合戦事同相模入道自害事」<sup>16)</sup>

去程二源氏八十萬騎ヲ三手二分テ、各二人ノ大将ヲサシソヘテ、三軍ノ師ヲ司トラシム、其一方ニハ大館次郎宗氏左將軍トシ、江田三郎行義ヲ右將軍トシテ、其勢都合十萬余餘騎極樂寺坂ノ切通ヘ向ラル、一方ハ堀口美濃守貞満并ニ大嶋讃岐守ヲ大将トシテ、七萬餘騎小袋坂ヘ向ハル、一方ハ新田小太郎義貞弟脇屋次郎義助ヲ大將軍トシテ大井田、山名、桃井、岩松、里見、額田、一井、羽河以下ノ一族前後左右ニ圍マセ、其勢六十萬騎ニテ氣和井坂ヨリソ向ハレケル、

岩松氏は、新田氏本宗系統の大館氏や世良田氏系統の江田氏とは異なり、鎌倉の切通の大將格としては描かれていない。「太平記」の岩松氏の位置づけは、化粧坂切通に出陣した新田義貞と脇屋義助兄弟の本軍に参加する一武將となっている。越後国の大井田氏や羽川氏、新田荘内に根をはる額田氏などの一族と同列に書き記されていて、重要な役割を与えられたとはいえない。「太平記」では、新田氏一族の一人として鎌倉攻略戦に参戦している程度の位置づけといえるだろう。

次に「太平記」とよく比較される「梅松論」の義貞挙兵の記述を見ていきたい。

京都大学本「梅松論」上巻<sup>17)</sup>

## 「太平記」における岩松經家一族の考察

〈前略〉

又見聞テ云、鎌倉ノ高時(北条)禪禪門滅亡ノ跡ハ如何カ候ケルヤト云。洛中ノ事コソソナガラ見聞シツレ。鎌倉事ハ不存知。乍去相知レル僧ノ其比見タリツルトテ語リツルハ、金剛山モヨセテ數萬ノ軍勢理ヲ失ス。京中モ赤松巴下度々寄来間、雖防戦六波羅及薩儀時分、將軍君ニ恐レ奉給ヨシ關東ニ聞エケレバ、皆人色ヲ失處ニ、五月中旬ニ上野國ヨリ新田左衛門佐義貞干時小太郎君ノ御方トシテ當國世良田ニ打出陣ス。是モ清和天皇ノ御後胤、陸奥守義家ノ三男、式部大夫義國ノ子息、大炊助義重戒名上西、陸奥新判官義康ノ連枝也。先立密ニ勅ヲ蒙リ給ニヨテ、義貞一流氏族皆打立ケリ。先山名・里見・堀口・大館ヲ先トシテ、岩松・桃井皆一人當千ニ非ズト云コトナシ。然當國守護人、長崎孫四郎左衛門尉高時代、即時ニ馳向テ合戦ニ及ト云共、既ニ上州一國輩義貞ニ屬スルニヨテ、相支ニ及ズ引退間、義貞多勢ヲ引率シテ武藏國ニ攻入間、兩國ノ輩大將軍トシテ大勢武藏國ニ發行ス。

〈後略〉

京大本「梅松論」では、新田莊内世良田で挙兵したとあるが、どちらも岩松氏の参加を記述している。「梅松論」作者は、大館氏や堀口氏、桃井氏とともに名をあげて、「一人当千」の武将と評価している。天正本「太平記」のようにフルネームではないので、岩松氏一族という捉え方である。その他、後世の史料になるが、「大館持房行状」にも元弘の鎌倉攻めの記述がある。

『大館持房行状』<sup>20)</sup>

〈前略〉

五月八日、於生品明神廟前、建旗、於是義貞為大將、<sup>(盛原)</sup>義助為次將、從之者大館宗氏、嫡子孫二郎幸氏、二男彌

次郎氏明、三男彦次郎純兼・堀口・岩松・里見・江田・桃井、一族三十餘人、百五十騎、不可以當高時軍、

〈後略〉

岩松氏は、「大館持房行状」においてもその姿を現し、新田氏一族の有力武将であつたことが分かる。また、天正本『太平記』や京大本『梅松論』は、鎌倉討滅の挙兵を描くにあたり、主だった新田氏一族の名前しかあげていないが、篠塚伊賀守重廣も参加したと考えられる。<sup>21)</sup> 篠塚伊賀守重廣は、後に新田氏四天王の一人に数えられ、大力で知られる勇猛果敢な武士であり、「太平記」の中でも、たびたびその凄まじい破壊力や金操棒を駆使しての奮闘ぶりを評価されている。

西源院本『太平記』卷二十四「篠塚落事」<sup>22)</sup>

〈前略〉

篠塚伊賀守一人ハ會テ其氣色モナシ、大手之二二之關殘ナク押開キ、只一人立タリ、降人ニ出シ為歎トミレハ、サハアラテ、紺絲之鎧ニ龍頭之冑之緒ヲシメ、四尺二寸有ケルイカ物作ノ太刀ニ、八尺餘リノ金サイ棒脇ニ挟ミ、餘所ニテハ定テ名ヲモ聞ツラム、今ハ我モ知レ、畠山庄司次郎重忠ニ六代之孫、武藏國ニラ（イ）ヒソタチ

## 【太平記】における岩松経家一族の考察

テ、新田左中將殿ニ一騎當千ト憑レタリシ篠塚伊賀守ト云者爰ニアリ、討テ勲功ニアツカレト、大音聲ヲ舉テ名乗ルママニ、百騎計引ヘタル中へ、少シモ薙々セス直地ニ走り懸ル、

〈後略〉

義貞の挙兵は、新田氏一族だけではなく、篠塚氏のような近隣の在地武士たちも集合していたと考えられる。篠塚伊賀守重廣（大信寺殿智證大禪定門）の墓所は、群馬県邑楽郡邑楽町篠塚の浄土宗大信寺（住職岡田真幸）にある。

## 四、史料から考える岩松氏

これまで『太平記』の西源院本や天正本における岩松氏の姿を追究してきたが、他の史料からはどのようなことを読みとることができるのか、考察していきたい。今日までの歴史学研究の成果では、峰岸純夫が、鎌倉攻め以前の段階で経家が、足利尊氏・直義兄弟と密接な連携を行っていた可能性のあることを明らかにしている。<sup>23)</sup>

岩松満親文書注文写（正本文書）<sup>24)</sup>

御證文注文 応永廿二 十 十五

一券内

一 自紀五方田嶋方へ内状 一通

一 長寿寺殿（足利尊氏）御書新田下野五郎殿へ

一 大休寺殿（足利直義）御書同兵部大輔（岩松経家）殿へ

（後略）

応永廿二年十月十五日 修理亮満親（花押影）

満範力 （花押影）

この文書からは、岩松氏が鎌倉幕府討滅の挙兵の謀を巡らせる上で、足利尊氏や直義兄弟と事前に連携していたことが推測させる。なぜならば、長寿寺殿（足利尊氏）と大休寺殿（足利直義）の御書が岩松経家へと届けられているからだ。その他にも、足利千寿王を義貞の鎌倉攻めに参戦させた紀五左衛門が、田嶋方（岩松氏）へ宛て書状を遣わしている。残念なのは、ここに記される尊氏・直義兄弟の御書が現存しないことである。つまり、岩松氏はどのような内容の書状を受け取っていて、それに基づいてどう行動したのかが不明なのである。しかし、岩松氏が鎌倉時代を通じて新田荘内外に所領を拡張し、新田氏本宗家に匹敵する実力を持っていたことを考えると、峰岸の指摘する鎌倉攻めの事前連携の可能性は大いに考えられる。その他、森茂暁は『南北朝の動乱』<sup>25</sup>において、「やはり鎌倉攻めの軍事行動に足利尊氏の力が大きく与っていたと考えざるをえない」との見解を示している。

次に軍忠状から岩松氏の動きを追ってみたい。

## 『太平記』における岩松経家一族の考察

熊谷直経軍忠状（熊谷家文書）<sup>26)</sup>

武藏國小四郎直経孫子虎丸申親父平四郎直春討死事

右、亡父直春今年元弘三年五月十六日馳参于御方、致敵ヶ度合戦之刻、同年廿日奉屬于新田遠江又五郎経政御手、就致軍忠、於鎌倉靈山寺之下討死畢、此等子細者、大將軍御檢知之上、同所合戦之軍勢吉江三位律師齋實、齋藤卿房良俊等所見及也、早賜御證判、為欲恩賞恐□言上如件、

元弘三年八月 日

「承了（岩（松経花押政）」

熊谷氏の軍忠状では、熊谷直春が新田遠江又五郎経政（岩松経政）の配下で戦い、鎌倉靈山寺付近で戦死したことを記述している。靈山は極楽寺坂切通と稲村ヶ崎一帯のラインである。岩松経政が靈山周辺で指揮官級の武将として活躍している。「太平記」の作者がいう極楽寺坂切通に大館氏と江田氏を派遣したということが、この史料によっても異なることが分かる。拙稿「『太平記』における大館氏と江田氏の考察―鎌倉攻め極楽寺坂切通の記述を中心に―」<sup>27)</sup>で明らかにになった世良田満義の靈山付近での活躍を考えると、大館氏と世良田氏、岩松氏の有力な新田氏一族が三連合というかたちで、極楽寺坂切通を攻める軍勢の采配を振るっていた可能性を指摘できる。

岩松経政の鎌倉攻めに関する軍忠状はこの一通であり、従来の研究でも岩松経政について詳しく分かっていない。峰岸純夫は、岩松遠江又五郎経政を岩松経家や岩松禪師頼宥の兄弟と位置づけている。<sup>28)</sup>さらに峰岸は「新田義貞」の

中で、「建武三年三月に陸奥国行方郡の小高城に相馬一族が楯籠もった際、相馬一族との縁戚関係を理由に軍勢催促を受け、田嶋小四郎を代官として派遣している」と記述しているが、この降岸の指摘する史料を読むと、降岸の誤説が明らかとなる。以下にその問題の史料を載せる。

相馬光胤軍忠状（陸奥相馬文書）<sup>29</sup>

相馬弥次郎光胤申軍忠事

右、白川上野入道家人等宇多庄熊野堂楯築間、今月十六日馳向彼所、致合戦分取手負事

相馬九郎五郎胤景分取二人

須江八郎分取一人白川上野入道家人六郎左衛門入道頭二

相馬小次郎胤顕生捕二人白川上野入道家人小山田八郎同人中間四郎三郎

木幡三郎兵衛尉分取一人

相馬彦二郎胤祐分取一人

新田左馬亮経政代田嶋小四郎分取一人

標葉孫三郎教隆分取一人

東條七郎衛門尉分取一人被紙畢

木幡二郎討死畢

## 『太平記』における岩松経家一族の考察

右、此外雖有数輩切捨略之畢、仍追敵敵対治畢、

建武三年三月十七日

惣領代子息弥次郎光胤

進上 御奉行所

〔(証判)承了(氏家道誠)〔花押〕〕

この史料は、結城氏の家人たちが熊野堂に城を構築して、交戦するかまえを見せたので、相馬光胤がその追討に向かったというものである。そして、その戦いの結果、相馬氏方の武将が取った首の数や戦死状況を報告した内容となっている。史料の中に「新田左馬亮経政代」とあり、岩松経政のことを指している。岩松経政は、相馬氏の応援に行けないので、代官として田嶋小四郎という人物を奥州へ派遣している。つまり、岩松経政は足利方として活躍していたことになり、岩松経家や岩松禅師頼宥とともに同じ側（北朝）に立っていた。峰岸は、相馬氏側が楯籠ったので、代官田嶋氏を派遣したとするが、それは逆であり、敵が籠城したので攻め込んだのである。

一方、吉井功児は、建武三年四月二十二日に足利方の斯波家長が上野国新田荘に進攻した際に斯波軍と戦って討死した阿代殿祇候人五郎兵衛尉経政を「岩松経政」と断定している（落合文書）<sup>31</sup>。この阿代殿祇候人五郎兵衛尉経政は、『新田町誌』によると阿代殿を阿代丸という童名と想定し、新田氏一族と考察している。<sup>32</sup>吉井説では、岩松経政が新田義貞方（南朝）ということになり、岩松氏も一枚岩でなかったことになってしまふ。しかし、先ほどの相馬光胤の史料の考察から、吉井説は誤りであることが判明した。

次の史料は、岩松経家が鎌倉攻めで力戦している様子を伝えるものである。

布施資平着到状写（有浦文書）<sup>35</sup>

着到

信濃國布施五郎資平合戦事

右、去五月十九日、馳參御方、奉屬搦手大將軍新田兵部大輔殿于時下野五郎殿、随侍大將軍岡部三郎下知、於長

勝寺前致合戦、同廿日、廿一日、廿二日、於小袋坂抽軍忠之條、侍大將軍并軍勢等被見知訖、然早下給御判、為備弓箭面目、着到如件、

元弘三年八月 日

「二見了（花押影）」

「承了 清恵（岩松経家）花押影」

この史料からは岩松経家が、一軍を率いる指揮官として長勝寺前や小袋坂と転戦している様子を知ることができ、長勝寺は、寺伝によると日蓮に帰依したという石井長勝が建立し、京都本願寺の故地とされている。現在の位置は、神奈川県鎌倉市材木座二丁目付近となる。<sup>36</sup>現在の長勝寺の位置を考えると、長勝寺と小袋坂切通を転戦するというのは、地理的に無理である。元弘三（一一三三）年五月下旬当時の長勝寺の正確な位置は不明である。ここで一番注目したいのは、岩松経家が指揮官級の武将として、采配を振るっている事実である。まさに岩松氏が、新田軍の中でも重要な役割を果たしていたことが確認できる。

## 【太平記】における岩松経家一族の考察

『太平記』の小袋坂切通攻撃の両大將は、新田氏本宗系の堀口美濃守貞清と後に足利方につく大嶋讃岐守義政となっていたが、岩松氏もこの方面で大將として活躍していたようだ。世良田清義が、靈山（極楽寺坂周辺）で活躍していた様子や岩松経家・経政の奮闘ぶりを考えても、『太平記』の記述と史料上の在り方が大きく違うことが分かる。実は岩松氏は新田氏本宗家の惣領義貞に匹敵あるいはそれを凌駕する経済力・軍事力を持っていたにもかかわらず、『太平記』の作者はその力を過小に評価しているのではなからうか。

## 五、所領を集積して力を蓄えた岩松氏

『太平記』の記述からは、その軍事力・経済力、広域的な活動が低く位置づけられている岩松氏であるが、実際はその通りなのかどうか、経済力に目を向けて考察を行いたい。岩松氏は、血統の面で足利氏と新田氏の両方の流れを汲むだけではなく、岩松氏の成立した直後から所領の集積を行っていた。先ほどの得川頼有の譲状（『正木文書』）以外にも、土地の集積をうかがい知る史料があるので、以下に掲載する。

相馬能胤譲状写（正木文書）<sup>36</sup>

ゆつりたてまつるとよこせんの所ちの事

行方郡内

千倉庄加比（北カ）草野定

御くりやのうちニ

てか、ふせ、ふちこころ、のけさき、

以上五か所也

右ところハとよこせんのりやうとして、ねうはうのさたたるへきことしちなり、ちやくしちやくなんといふさま  
たけおいたすことあらんニおきてハ、いかなるけんもんニもよせて、ねうはうのさたたるへし、よつてこにちの  
さたのためニ、ゆつりしやうおたてまつる事如件、

嘉禄三年十二月 日

（相馬）平能胤在判

將軍（藤原頼経）家政所下文写（正本文書）<sup>37</sup>

將軍家政所下 平氏子字土用

可令早領知陸奥国行方郡内千倉庄加北草野定下総国相馬御厨内手加、布勢、藤意、野介（毛）崎地頭職事  
右人、任父能胤嘉禄三年十二月日讓状、可領知之状、所仰如件、以下、

貞永元年十一月十三日

案主左近將監菅野在判

知家事内舍人清原在判

『太平記』における岩松経家一族の考察

令左衛門少尉藤原在判

別当相模守平（北条時房）朝臣在判

武蔵守平（北条泰時）朝臣在判

岩松氏初代惣領時兼は、千葉常胤の孫にあたる相馬能胤の娘土用御前を嫁にもらったことで、新田荘外にも所領を獲得することになった。このことが、岩松氏の後の躍進につながったのである。さらに次に載せる史料に登場する阿波国生夷荘は、岩松氏の西国への道を開くことになった重要な所領である。

岩松時兼讓状写（正木文書）<sup>(3)</sup>

讓渡 ねうハう(女房)の所

あは(阿波国生夷庄)のくにいくいな(武蔵国春原庄)のさう

むさし(武蔵国春原庄)のくにすんの(万吉郷)はらのさうの内ま(万吉郷)んきち(万吉郷)のかう

右件の所々、御下文らをあいくして、ゆつりわたす事しち也、たたしかきりあるねん(年貢課役)くくわやく(状)にいたてハ、先例にまかせてさたをいたすへし、よてこにちのせうもんのため、ゆつりわたすさう如件、

寶治二年八月八日 源時兼(岩松)（花押影）

岩松氏が、どのようにして阿波国生夷荘を手に入れたのかは不明であるが、岩松氏は早い段階で西国の所領を獲得して、その勢力を確実に伸ばし始めていた。通説では、久保田順一が承久の乱で入手したという見解を出しており、有力視されている。<sup>39)</sup> 岩松氏が、四国でどのような活動を行っていたのかを知る上で貴重な史料が残されている。

<sup>(岩松)</sup>  
新田経家請文(紀伊小山秀太郎文書)<sup>10)</sup>

阿波國海賊出入所々、上下□□<sup>(下力)</sup>關東御事書并六波羅殿御□□<sup>(任力)</sup>文等案文、謹拝見仕候畢、□□被仰下之旨、隨

見聞可触申候、於領内<sup>(勝浦郡)</sup>勝浦新庄小松島浦船者、定紋唐梅候畢、此條若偽申候者、日本國中大小明神御罰可罷

蒙之状如件、

元亨四年四月廿七日

預所肥後守(岩経松)家請文

小山石見守殿

預所肥後守<sup>(岩松)</sup>経家請文案(小山文書)<sup>11)</sup>

阿波国海賊出入所々、被□□<sup>(御力)</sup>關東御事書并六波羅殿□□<sup>(御力)</sup>案案文謹拝見仕候畢、□□仰下旨、隨見聞、可触

申候、於領内勝浦新庄小松島浦船者、定紋唐梅流畢、此條若偽申候者、

日本國中大小明神御罰、可罷蒙之状、如件、

## 【太平記】における岩松経家・族の考察

元亨四年四月廿七日

預所肥後守（岩松）経家請文

(経幸)  
 小山(石) 右見寺殿

これらの史料の内容は、阿波国勝浦新庄預所岩松経家が小松島浦の船に定紋唐梅を掲げて、海賊たちとの区別を試みたものである。この海域が、海賊や悪党の跳梁跋扈する危険地帯だったことが分かる。先の史料（新田経家請文○紀伊小山秀太郎文書）に「関東御事書并六波羅殿御下文等案文、謹拝見仕候畢」とあるが、岩松経家を仲介して紀伊国の在地武士小山氏に阿波国勝浦新庄や小松島の船に旗（定紋唐梅）をあげて、海賊船と区別するように伝達している。折しも鎌倉幕府は、元亨四（一三二四）年に悪党海賊禁圧令を出している。<sup>七</sup>

阿波国生夷荘を手中にした岩松氏は、この所領を足がかりにして、四国の勝浦新荘の預所に就任したと考えられる。すでに「小松島市史」<sup>八</sup>や「徳島県史」<sup>九</sup>が明らかにしているように、岩松経家は阿波国の海賊に対処できるだけの政治力と実行力、軍事力を兼ね備えていた。

つまり、岩松氏は鎌倉時代末期の四国において、鎌倉幕府の命令を受けて、活動を行うほどに成長していた。岩松氏は、初代の時兼から婚姻を媒介に所領を新田荘外からも得て、その後も西国に所領を獲得して幅広く活動を行っていた。鎌倉攻め頃の岩松家当主の経家は新田義貞・脇屋義助兄弟を政治力や経済力、軍事力で上回っていたことを示唆している。鎌倉時代末期の岩松経家の新田荘外での活躍は、義貞の初見史料が完券から始まるのとは対照的である。「太平記」の鎌倉攻めの記事が、岩松氏の鎌倉末期頃の實力を必ずしも正確に反映したものではないことが、こ

うした所領集積や四国での活動を示す史料から良く理解できる。

## 六、播磨国でも活動した岩松経家

「太平記」によれば、新田義貞は鍛倉攻略と得宗北条高時（一四代執権）、最後の執権（一六代）赤橋守時らの北条氏一族を討滅した功績により、後醍醐天皇から上野国と播磨国を賜ったとされている。歴史学の通説においても、義貞が上野と播磨、越後の三ヶ国を支配している様子が、史料から裏づけられている。<sup>55)</sup>以下に「太平記」巻十二の恩賞の記述を引用する。

西源院本「太平記」巻十二「千種頭中将事」<sup>56)</sup>

東國西國已ニ静謐シケレハ、筑紫ヨリ大伴、少貳、菊池、松浦ノ者共、大船七百艘ニテ参洛ス、新田左馬助舎弟兵庫助七千餘騎ニテ上洛セラル、此外國々武士共一人モ不残上リ集ル間、京白河ニ充滿シテ、王城富貴日来二百倍セリ、諸軍勢之恩賞ハ延引ストモ、大功ノ輩ノ抽賞ヲ行ハルヘシトテ、足利治部大輔高氏卿ニ武藏、常陸、下総、三ヶ國、舎弟左馬頭直義ニ遠江國、新田左中将義貞ニ上野、播磨、其弟治部大輔義助ニ駿河國、楠判官正成ニ摂津國、河内國、名和伯耆守長年ニ因幡、伯耆ノ兩國ヲソ行ハレケル、

「太平記」における岩松経家・族の考察

義貞が上野国と播磨国、弟の脇屋義助も駿河国を手に入れたとされている。上野国と播磨は、史料上からも新田氏の支配を裏づけられるので、「太平記」の記述は正しいというのが通説になっている。しかし、脇屋義助の駿河国支配は、史料上で確認できないために虚構の可能性が高い。義助が、実際に駿河国司の職務を果たした史料とはいえないが、駿河国での脇屋義助の足跡を示す史料もある。

脇屋義助願文写（駿河丸子神社・浅間神社文書）<sup>(行)</sup>

今度為鎌倉追討、当所丸子神社天曆任（例）霊、行光造太刀一振寄進之、武運長久篠塚五郎承之、宮仕子神尾

藏人於神前永大祈禱可有者也、

建武二乙亥三月十五日

脇屋治部

源義助（花押）

脇屋義助が新田氏一門の武運長久を祈って、駿河国の丸子神社へ太刀一振りと願文を納めるという内容である。駿河国司としての活動ではないが、義助と駿河国のつながりを考える上で一つの参考になる。

この他にも、「太平記」の中で義貞が播磨国を自ら差配できていたことをうかがわせる記事がある。

西源院本「太平記」卷十六「西國蜂起新田義貞心發船坂熊山等合戰事」<sup>48</sup>

二八

去程ニ新田左中将義貞朝臣、病氣能成テケレハ、五萬餘騎ノ勢ヲ卒シ、西國ヘ下向シ賜フ、後陣ノ勢ヲ待調ン為  
 ニ、播磨國賀古川ニ四五日逗留有ケル程ニ、宇津宮治部大輔、紀伊常陸守、菊池次郎三千餘騎ニテ下着ス、其外  
 摂州播州丹後ノ勢共、思々ニ馳參リケル間、程ナク六萬餘騎ニ成ニケリ、サラハ驪テ、赤松ヲ退治スヘシトテ、  
 斑鳩ノ宿マテ打寄給ヒケレハ、赤松入道圓心、小寺藤兵衛尉ヲ以テ新田殿ヘ申ケルハ、圓心不肖ノ身ヲ以テ、元  
 弘ノ初大敵ニ當リ、逆徒ヲ賁退シ事、恐ハ第一ノ忠功トコソ存セシニ、恩賞ノ地、降參不義ノ輩ヨリモ、猶卑ク  
 候間、一旦ノ恨ミニ依テ、多日ノ大功ヲ棄候キ、乍去兵部卿親王ノ御恩、生々世々難忘存候ヘハ、全ク御敵ニ属  
 シ候事、本意トハ存セス候、所詮當國守護職ヲタニ、繪旨ニ御辭状ヲ副テ下賜候者、如元御方ニ參シ、忠節ヲ致  
 スヘク候ト申タリケレハ、義貞朝臣是ヲ聞給テ、此事サラハ子細有マシト、ヤカテ京都ヘ飛脚ヲ立テ、守護職補  
 任ノ繪旨ヲ申シ成サレケル、其使節ノ往反、已二十餘日ヲ過ケル間ニ、赤松城ヲ拵スマシテ、當國守護國司ヲ  
 ハ將軍ヨリ給テ候間、手ノ裏ヲ翻ス棟ナル繪旨ヲハ、何カハ用ヒ候ヘキト弄テコソ返シケレ、新田左中将是ヲ聞  
 給テ、王事母縱、以恨朝敵トナル共、戴天欺天乎、其儀ナラハ、爰ニテ數月ヲ送共、彼城ヲ賁落サテハトケルマ  
 シトテ、六萬餘騎ニテ、白旗ノ城ヲ百重千重ニ取圍ミ、夜晝五十日、息ヲ繼セスシテ攻ラレケル、

この「太平記」卷十六の記述によると、義貞は、延元元・建武三（一三三六）年に九州へ敗走した足利尊氏と直義兄弟にとどめを刺そうと、中国地方へ出陣した時に悪党赤松円心の籠る播磨国白旗城に行く手を阻まれた。籠城の準

## 『太平記』における岩松經家一族の考察

備が不十分だった赤松円心は、早速義貞に対して後醍醐天皇の恩賞に不満があったので、播磨国守護職を拝命できれば、護良（兵部卿）親王の御恩もあるから官方（南朝）へ寝返るといふ内容の虚言を使った。<sup>19</sup>この時、義貞は赤松円心の申し出を真に受けて、その繪旨を京都から得るために日数を費やし、大勢を失っている。さらに円心が謀ったことと怒った義貞は、白旗城を攻略しようとして攻め立てたが、ついに攻略できなかった。この義貞と赤松円心の白旗城をめぐる攻防戦は、激戦が展開された模様である。それを物語る史料が残されているので、以下に掲載する。

海老名景知申状（海老名文書）<sup>50</sup>

## 立申紛失事

海老名源三郎景知申文書紛失事

右子細者、播磨国矢野庄内別名下司職者、賜文治二年御下文、知行無相違之処也、而弘安五年十一月廿五日預御下知畢、仍留案等分明也、依之（矢野）盛重讓頼（上有智）保状一通、又願念俗名頼保讓袈裟王丸状一通、季茂童名袈裟王丸讓頼重状一通、将又、頼重讓景知畢、而以彼御下知状以下讓状等、於建武三年故赤松殿（赤松則村）播磨国被構白旗城之刻、自最初榊籠景知畢、依新田義貞与類、寄来那波浦大嶋城之間、以景知若党等、雖致合戦、彼没落訖、然間云当所、云景知宿所、被放火之刻、件重書等悉以令紛失畢、雖然、留案右備此条、無其隱之上者、申請御存知人々證判、為備後證龜鏡、仍紛失之状如件、

康永二年八月日

（海老名）源 景知（花押）

「文書紛失之段承候畢、

(海老名) 源 季賢 (花押)

〔中略〕

文書紛失事承候畢、

康永二年八月日

雅楽助貞範

(花押)

「赤松筑前守」  
(押紙)

この史料の中で、海老名景知が白旗城合戦の際に赤松円心方に参加したために、義貞軍の放火によって、重代相伝の古文書を喪失してしまったという内容である。義貞軍が、白旗城を攻略できないためにいらだったのか、放火までしていたことが読みとれる。

その後、義貞軍は脇屋義助の進言を受け入れて、赤松氏の播磨国白旗城を力攻めにするのではなく、包囲にとどめて脇屋義助に別働隊をあずけ、山陽道を西へ下した。<sup>5)</sup>

義貞は元弘の内乱の功績で播磨国を得ていたからこそ、播磨国守護職を赤松円心へ譲ることを実行に移せたのであろう。また、赤松円心は自らが得るはずだった播磨国司を新田義貞に取られてしまったと逆恨みをした可能性がある。義貞への当てつけの意味合いもこめた謀略と考えることもできる。

このように「太平記」や通説では、新田義貞が恩賞として得た播磨国であったが、岩松経家の播磨国での動きを考

「太平記」における岩松経家一族の考察

えさせる史料が存在するので、以下に掲載する。

後醍醐天皇諭旨（由良文書）<sup>(8)</sup>

伊勢國笠間庄 維貞（大佛）跡

駿河國澁俣郷 泰家（北條）法師跡

同國蒲御厨 泰家跡

同國大池庄 高家（名越）跡

駿河國大岡庄 泰家法師跡

甲斐國安村別符 同跡

陸奥國泉荒田 同跡

出羽國會津 顯業（金澤）跡

播磨國福居庄 維貞跡

土左國下中津山 泰家法師跡

右、所々地頭職、可令管領者、

天氣如件、仍執達如件、

元弘三年七月十九日

（國崎經國）  
式部少輔（花押）

(岩松経家)  
兵部 大輔殿

後醍醐天皇繪旨 (由良文書)<sup>38)</sup>

播磨國福居庄事、被止良日知行之上者、止其妨、可被全所務者、

天氣如此、仍執達如件、

(建武元年)

三月廿二日

(岩松経家)  
新田兵部大輔殿

右小弁藤長

この史料は、建武元年三月に播磨國福居莊で良日という人物の知行をやめるので、その妨害を早くとめよという内容の繪旨である。その前段階として、岩松経家が後醍醐天皇の繪旨によって、播磨國福居莊（北条氏一門大仏維貞跡）を賜っている。岩松経家が天皇の命令を受けていることから、経家も播磨國で義貞とは別に行動していたと考えられる。しかし、岩松経家の播磨國での動向を伝える史料は、この他に現存しないために播磨國でどのような動きをしていたのか追究できない。

しかし、義貞が国司に就任した播磨國で、後醍醐天皇の繪旨を得た岩松経家が活動しているという史料があるということは、義貞の播磨國支配を脅かしていた可能性が考えられる。なぜならば、岩松氏は鎌倉幕府を倒した後から足利方になり、少しずつ義貞・義助兄弟と対立する関係になっていくからである。その他、新田義貞の播磨支配を円滑

## 『太平記』における岩松経家一族の考察

にするために、播磨国府中（播磨国衙）に送り込まれていた里見義俊が、建武二年六月に何者かに殺害されてしまった事実もある。<sup>51</sup>これは、里見義俊が播磨国目代として現地に出張していたところ、抵抗勢力（足利氏与党）のために殺害された可能性が高い。里見氏殺害の首謀者は、現在のところ不明となっているが、播磨国に強い影響力を持ち、悪党戦術に長けた赤松氏の一派に襲撃された可能性を指摘できる。

足利方の岩松経家が播磨国福居荘での乱妨を鎮めるように依頼されるという事実は、岩松氏の経済力や軍事力に期待があったとの解釈もできる。いずれにしても、新田義貞の播磨国支配は万事円滑なものではなく、本章で見たように在地に足利氏与党の赤松円心一族が城郭を構え、足利方の岩松氏も播磨国に利権を持っていて、無視できない勢力となっていたのであろう。義貞の播磨国支配が前途多難に満ちていたことだけは、間違いない。

## 七、終わりに

岩松氏は「太平記」の鎌倉攻めの場面において、化粧坂切通を攻める新田義貞・脇屋義助兄弟の新田本軍の一員として姿を現すのみで、切通の大將格として描かれていない。しかし、史料を丁寧に見ると、岩松経家が小袋坂切通や長勝寺前付近で大將格として奮戦していた。その他、岩松経政も霊山（極楽寺坂）稲村ヶ崎で采配を振るっていた。こうした史料上の記述は、岩松氏の真の力を物語るものであり、鎌倉時代の岩松氏自体の躍進を考えれば、納得のゆくものである。

鎌倉末期に岩松経家が、四国で悪党取締に一役買っているなど岩松氏の活躍は新田荘内外でも目覚ましいものがあ

った。岩松氏が鎌倉末期に足利氏と連携していたというのも、こうした新田荘外の活動を抜きには考えられない。義貞の鎌倉攻めは、岩松氏の広域活動によって得られた情報ネットワークと緊密な足利尊氏・直義兄弟との連携作戦があればこそ、可能になったのであろう。「太平記」巻十の義貞が、鎌倉幕府の派遣した徴税使黒沼彦四郎入道殺害（太田市世良田の二体地藏塚史跡）と紀出雲介親連の捕縛という感情的な突発的事態により、やぶれかぶれで生品明神で挙兵したという記述はこうした史料の検討からも矛盾していると提言したい。

「太平記」の作者が、義貞と脇屋義助を中心にした新田氏本宗系統（大館氏・堀口氏）に重点を置いて執筆していた事実が、史料との対比によってより鮮明になった。岩松経家の阿波国での活動を踏まえても、「太平記」作者の新田義貞びいきが、通説以上に強いものであるといえるのである。

史料を考察した結果、岩松経家が小袋坂切通で指揮官級の武将として、縦横無尽に幕府軍を翻弄していたことが分かった。そして、激戦区の極楽寺坂（稲村ヶ崎のライン）は新田氏本宗系の実力者大館幸氏・氏明兄弟、足利千寿王（後の足利義詮）を擁立した世良田満義、岩松経政が一致協力して幕府（北条氏）軍と白熱の攻防戦を展開したという構図が、実態だったのではないだろうか。

さらに義貞が恩賞として得た播磨国の支配（播磨国司）も、在地に城を構える赤松円心の一族や足利方に味方して急速に台頭してきた岩松経家によって、必ずしも有効に機能していないことを指摘した。

本論文の史・資料、論文収集や辞書検索等では、特に明治大学中央図書館（千代田区）と明治大学和泉図書館（杉並区）、桐朋学園大学音楽学部附属図書館（調布市）、帝京大学メディアライブラリーセンター（八王子市）、専修大学図書館（神田分館）、國學院大学図書館（渋谷区）、調布市立中央図書館（調布市）、国文学研究資料館（立川市）

## 『太平記』における岩松経家・族の考察

で御世話になった。ここで厚く御礼申し上げる。

注

- (1) 久米邦武「太平記は史学に益なし」(『史學会雜誌』二二、一八九二年)一四頁。
- (2) 峰岸純夫「新田義貞」(吉川弘文館、二〇〇五年)。
- (3) 奥宮敬之「上州新田一族」(新人物往来社、一九八四年)八四―一六頁。
- (4) 佐藤和彦「南北朝内乱」(小学館、一九七四年)八〇―八一頁。
- (5) 田中奈保「新田義貞」(櫻井彦ほか編「足利尊氏のすべて」新人物往来社、二〇〇八年)二四五―二五三頁。
- (6) 「返子市史」(通史編)(神奈川県返子市、一九九七年)。
- (7) 峰岸純夫「新田岩松氏」(戎光祥出版、二〇一一年)六六―六九頁。
- (8) 「太田市史」(史料編中世)(群馬県太田市、一九八六年)一七三頁。
- (9) 小此木輝之「長樂寺文番」(統群書類従完成会、一九九七年)文番番号四〇。
- (10) 「群馬県史」(資料編5中世1)(群馬県、一九七八年)正文文番一五号。
- (11) 「太田市史」(史料編中世)(群馬県太田市、一九八六年)二三七頁。
- (12) 「太田市史」(史料編中世)(群馬県太田市、一九八六年)六五〇頁。
- (13) 「太田市史」(史料編中世)(群馬県太田市、一九八六年)七〇五頁。
- (14) 「大泉町誌」(下巻歴史編)(群馬県邑楽郡大泉町、一九八三年)二三七頁。
- (15) 「太田市史」(史料編中世)(群馬県太田市、一九八六年)二九五頁。
- (16) 鷺尾順敬校訂「西源院本太平記」(刀江書院、一九三六年)二三七―三三九頁。  
天正本「太平記」(国文学研究資料館所蔵)整理番号E一四三六。
- (17) 長谷川端校訂「太平記」(新編日本古典文学全集五四)(小学館、一九九四年)四八二―四九二頁。  
鷺尾順敬校訂「西源院本太平記」(刀江書院、一九三六年)二四六―二四七頁。
- (18) 「京都大学本梅松論」(京都大学国文学会、一九六四年)一九頁。
- (19) 「群馬県史」(資料編6中世2編年史料1)(群馬県、一九八四年)文番番号二二二。
- (20) 「群馬県史」(資料編6中世2編年史料1)(群馬県、一九八四年)文番番号二二二。

- (21) 『邑楽町誌』(上) (群馬県邑楽郡邑楽町、一九八三年) 三六三頁。
- (22) 鷲尾順敬校訂『西源院本太平記』(刀江書院、一九三六年) 六七六頁。
- (23) 峰岸純夫『新田義貞』(吉川弘文館、二〇〇五年) 五三〜五六頁。
- (24) 『太田市史』(史料編中世) (群馬県太田市、一九八六年) 六一三〜六一四頁。
- (25) 森茂暁『南北朝の動乱』(吉川弘文館、二〇〇七年) 四三頁。
- (26) 『群馬県史』(資料編6中世2編年史料1) (群馬県、一九八四年) 文書番号五六八。
- (27) 細野宜秀『「太平記」における大館氏と江田氏の考察―鎌倉攻め極楽寺坂切通の記述を中心に―』(法政大学大学院紀要 六九、法政大院、二〇一二年)。
- (28) 峰岸純夫『新田義貞』(吉川弘文館、二〇〇五年) 一五八〜一六二頁。
- (29) 峰岸純夫『新田義貞』(吉川弘文館、二〇〇五年) 一五八頁の五〜七行目。
- (30) 『南北朝遺文』(関東編第一巻) (東京堂出版、二〇〇七年) 文書番号〇四二一。
- (31) 吉井功児『建武政権期の国司と守護』(近代文藝社、一九九三年) 三九頁。
- (32) 『新田町誌』(第四巻特集編新田荘と新田氏) (群馬県新田郡新田町、一九八四年) 二七一〜二七三頁。
- (33) 『群馬県史』(資料編6中世2編年史料1) (群馬県、一九八四年) 文書番号五六九。
- (34) 『角川日本地名大辞典』(二四神奈川県) (角川書店、一九八四年) 五八八頁「長勝寺」。
- (35) 注27と同じ。
- (36) 『太田市史』(史料編中世) (群馬県太田市、一九八六年) 七九〜八〇頁。
- (37) 『太田市史』(史料編中世) (群馬県太田市、一九八六年) 八三頁。
- (38) 『太田市史』(史料編中世) (群馬県太田市、一九八六年) 一〇七〜一〇八頁。
- (39) 久保田順一『新田一族の盛衰』(あかぎ出版、二〇〇三年)。
- (40) 『鎌倉遺文』(古文書編第三十七巻) (東京堂出版、一九八八年) 文書番号二八七三四。
- (41) 『日置川町史』(第一巻中世編) (和歌山県西牟婁郡日置川町、二〇〇五年) 小山氏関連史料三二二頁。
- (42) 網野善彦『鎌倉幕府の海賊禁圧について』(『日本歴史』二九九、一九七三年)。
- (43) 『小松島市史』(上巻) (小松島市、一九七四年)。

## 『太平記』における岩松経家・族の考察

- (41) 『徳島県史』〈第2巻〉(徳島県、一九六六年)。
- (45) 峰岸純夫「新田義貞」(吉川弘文館、二〇〇五年)。
- 『太田市史』〈通史編中世〉(群馬県太田市、一九九七年)。
- (46) 鷺尾順敬校訂「西源院本太平記」(刀江書院、一九三六年)三〇七〜三〇八頁。
- (47) 『南北朝遺文』〈関東編第一巻〉(東京堂出版、二〇〇七年)文書番号二一四。
- (48) 鷺尾順敬校訂「西源院本太平記」(刀江書院、一九三六年)四三二〜四三三頁。
- (49) 『尾島町誌』〈通史編上巻〉(群馬県新田郡尾島町、一九九三年)三三七頁。
- (50) 『兵庫県史』〈史料編中世3〉(兵庫県、一九八八年)一一八〜一九頁。
- (51) 『兵庫県史』〈第2巻〉(兵庫県、一九七五年)六四八〜六四九頁。
- (52) 『群馬県史』〈資料編6中世2編年史料1〉(群馬県、一九八四年)文書番号五六三。
- (53) 『群馬県史』〈資料編6中世2編年史料1〉(群馬県、一九八四年)文書番号五八七。
- (54) 『尾島町誌』〈通史編上巻〉(群馬県新田郡尾島町、一九九三年)三三六〜三三七頁。

## Study of the Iwamatsu Tsuneie clan in *Taiheiki*

Takahide Kono

*Japanese literature speciality Master Course 2*

### Abstract

This paper considers the Iwamatsu Tsuneie clan trend by comparing and examining *Taiheiki* and historical records. In the conventional history, it was the principal axis to research of the capability of the politics and the military affairs of a Nitta Yoshisada individual, the Southern Dynasty, meaning, etc. Moreover, in Nitta clan research in *Taiheiki*, it was the mainstream to consider Yoshisada's person image which led comparison with other generals. Then, I would like to clarify the Iwamatsu clan image in the view to the Iwamatsu Tsuneie clan of the *Taiheiki* author, or *Taiheiki* by performing contrast of *Taiheiki* and historical records.

The ancient documents of houses, etc. are used for historical records. I utilize *Taiheiki*, the *Seigenin-bon* made old also in *Taiheiki*.

A prologue shows way return of a previous work, the meaning of its research, a viewpoint, and a measure plan.

This paper, I focus on the influential branch, Iwamatsu. Although the Iwamatsu were not important figures in *Taiheiki*, I have considered what kind of activity there actually was using the historical records related to Iwamatsu Tsuneie and Iwamatsu Tsunemasa. As a result, although Iwamatsu branch was represented by only one general in *Taiheiki*, it is shown clearly in fact that two had participated at the level of general class in the Kamakura attack.

In the last chapter, I described the result and subject of this paper and the view of future research.